【用途特集】衛生材料（医療・介護・化粧品雑貨・食品関連）

スパンレース不織布事業が 2026 年 1 月より稼働
「素材と機械の融合」を強みに海外を開拓へ

株式会社瑞光

㈱瑞光は1946（昭和21）年に大阪市東淀川区において創業。女性用生理用品の加工機からスタートし、その後おむつ加工機など徐々に市場を拡大させていった。コーポレートメッセージに「Make the Impossible Possible」を掲げ、培ってきた独自技術で競争優位性を確立。その卓越した技術により国内シェアの90％を占めるほか、世界トップブランドの衛生用品製造機器メーカーの一社として高い評価を得ている

昨年2025年、日本国内の不織布業界再編の動きの中で、ユニチカからスパンレース事業を譲受。今年１月から本格的に高品質でソフトな肌触りのスパンレース不織布の製造販売事業に参入し、主力事業の一つとして展開している。

５月末、大阪府茨木市彩都の同社本社を訪れ、スパンレース事業推進室　室長の腰島美和氏にスパンレース事業取得の狙いと今後の展望について話を伺った（文中敬称略）。

本誌－以前、貴社がまだ摂津本社だったころにはよく訪問させていただいていました。今回久しぶりの誌面へのご登場となりますので、茨木市彩都の方へ移転された経緯を含め、自社紹介からお願いします。

腰島－弊社は衛材用品を作るための製造装置の開発、製造および販売を行っている機械メーカーになります。メインとしてはおむつ製造機や生理用品製造機などに携わり、今年で創業80年を迎えました。1986（昭和61）年に摂津市へ本社工場を移転。多くのお客様からお引き合いをいただいていましたが、敷地内の施設だけではマネジメントできない規模になったため、近

本社外観

隣にいくつか新しく工場を設け、複数拠点で対応していました。しかしスタッフが各拠点間を移動する時間がロスですし、トラブル発生時にも効率が悪いということで、2021年11月に茨木市彩都はなだに約４ヘクタールの土地を購入して本社工場を移転、設計から組立、試運転まで一貫した機械製造を可能として今日に至ります。

本誌－生産拠点の集約を目的に、敷地面積の広い現在の場所へ本社機能のほか製造、開発などのすべての部署を移転されたと。

腰島－おおよその機能は集約しました。摂津市鳥飼中にありました工場は新たに R&D センターとして生まれ変わり、スパンレースの開発設備を取り込むなど、大きくリニューアルしております。今後、お客様をご案内して各種開発に取り組みたいと考えています。

本社のある彩都地区は自然が豊富に残る丘陵地で、私を含めた半数くらいは車通勤をしていますが、阪急と JR、大阪モノレールの最寄り駅と会社を結ぶ送迎バスも走らせています。

本誌－弊誌が提携している海外の不織布専門誌

などでもしばしば貴社の記事をお見掛けします。現在の国内／海外の売り上げシェアはどのような比率でしょう。

腰島－本業では、直近では海外向けの販売が約８割というところになっています。ただ年によっても違いますので今後も変わってくるかとは思います。

岐阜の垂井に拠点を置くスパンレース事業に関しては、現状は国内向け販売が主体ですので、これから海外展開に注力していきます。

本誌－では、いよいよ新規にスタートされたそのスパンレース事業についてお伺いします。昨年にユニチカからスパンレース事業を譲受されましたが、その経緯と狙いは。

腰島－そもそも弊社は衛材製品を製造する機械を作るメーカーですが、プリメイド（既製品）は100％ありません。こういったものを作りたいというお客様のご要望を聞き出してディスカッションを行い、製品のカスタマイズを行っていきます。そうした中で私たちも、この資材を用いれば良い感じになるとか、このような付加価値が生まれるだとか、さまざまな素材と機械の組み合わせセットで考えるようになりました。

そして製造機器だけではなく、不織布素材についても社内である程度の知見を増やし、不織布メーカーとの共同開発も行なっていました。

垂井事業所のスパンレース製造ライン

このような流れから、不織布について自社でも製造してはどうかという議題があがっていました。

本誌－以前からユニチカとスパンレースのお取引があったのでしょうか。

腰島－いえ、直接のお取引はありませんでした。ただ弊社は石油由来のものから天然繊維へという世の中の流れに沿う形でコットンを扱っていこうと考えており、２年前の2024年に岡山県倉敷市に子会社 COTEX を設立し、脱脂綿を医療機器や医療メーカーへ製造販売する事業をスタートさせていました。同社で精錬漂白した試作品のコットンをユニチカさんへ納品していました。そのような中、ユニチカさんがスパンレース事業の売却を考えているという話があり、市場開拓の余地があると考えて挙手しました。

本誌－その時、そのタイミングが合致したわけですね。ちなみに、その際にスパンボンド事業についてはどうだったのでしょう。

腰島－世界的な傾向である SDGs という観点からみまして、私たちはコットンなど天然繊維の流れを求めていました。そのため、原料がポリマー樹脂などのスパンボンドは少し違うと判断したものと思います。

本誌－スパンレース事業を選択された理由がよく分かりました。さて、昨年2025年秋の基本合意から約半年経ちますが、現在の貴社スパンレース事業の稼働状況は。

腰島－実際にスパンレース事業をスタートさせたのは今年１月からになります。岐阜の垂井事業所の従業員はじめ、ユニチカ本社で従事されていた営業や購買の方々、さらには岡崎工場の開発スタッフの方たちにも転籍いただいています。正直、異なるものを扱ってきた会社同士ですから会社の方針や社風などいろいろな違いはあります。しかし両者の良いところを引き出す形で進めており、お客様へご迷惑をかけずに継

続して高品質の商品をきっちり届けることを第一の目標とし、運営しております。

本誌－感じた差異とは、例えば。

腰島－大きく違うところでいいますと、製造機械の場合は、ご注文いただいてからいろいろ仕様を決めて立ち合いがあって、お客様のもとに機械が届くまでに最低でも１年はかかります。不織布の場合は、今日ご注文いただいて製造して直近で納品するようなサイクルの違いが挙げられます。

これまで１年後の売り上げを念頭にロングスパンで推進していましたが、スパンレース事業の場合、当たり前のことではあるのですが、毎月、繰り返しきっちり売り上げを立てていくというスパンの部分でギャップを感じました。

本誌－製造しているスパンレース不織布は、「コットエース」「エスコット」「ルベラ」の３タイプで変わりなく。

腰島－弊社に移ってきてからも、製品・ブランド名などそのまま引き継がせていただきました。ラベル表記のこれまで UNITIKA だったところを ZUIKO に変えただけになりますね。

本誌－販売先については。

腰島－まず、これまでのユニチカのお客様へは変わりなく素材をご提供させていただいています。ユニチカと瑞光で共通のお客様もおられますので、その辺については深いところでお話できています。

もちろん新規として、これまでの瑞光の機械のお客様へもどんどんご提案させてもらっています。つい先日になりますが、５月中旬にスイスのジュネーブで開催された「INDEX26」展へ出展しました。欧州を中心に多数の来場者の方にブースを訪問いただき、今後はスパンレース事業へ参入していくことをアピールしまして、好評に受け止めていただきました。

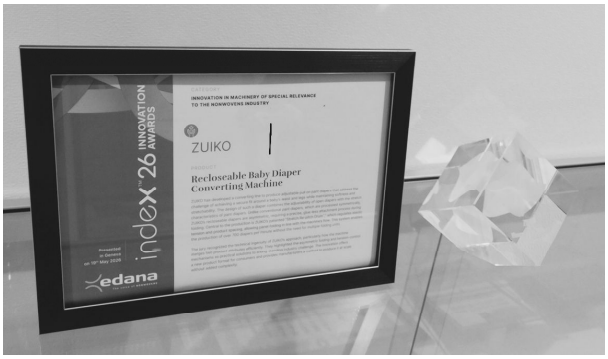
本誌－貴社の衛材製造機械は海外でも高い評価を得ていますし、潜在的なスパンレースのユーザーが見込まれます。

腰島－これまでユニチカさんは、どちらかといえば国内メインで販売をされていました。もちろん従来の国内のお客様も大切にしなければいけませんが、私たちは米国や欧州、中国、東南アジア、南米に拠点を持っています。今回のINDEX26展では各拠点長など主要メンバーが集まりましたので、それぞれの拠点で精力的にスパンレース素材の販売を行っていくということを強くアピールしてもらいました。

本誌－ INDEX26展では、衛材機器全般の動きはどうだったでしょうか。

腰島－製造装置の方ではイノベーションアワードを受賞し、大変多くの注目をいただきました。それに応じた引き合いもいただいております。

昨年デルタ社を買収し、イタリアのミラノに製造拠点を新たに設置しましたので、ここを中心に、欧州をはじめ西アジアやアフリカ、そうした地域のお客様が安心して発注できる環境が整いつつあります。機械の製造については、一度ライン止まると再開して作ることが難しくなります。そういった時のフォローアップが大事な業界なのです。近くに拠点があることで安心感があり、欧州方面の調子が非常に良くなってきていると聞いています。



INDEX26 展では、Recloseable 幼児用おむつ加工機で機械部門イノベーション・アワードを受賞

工場をリニューアルした R&D センター

また、ブースにお立ちより下さったお客様から、コットンスパンレースへの引き合いやさらにそのスパンレースを機械技術で加工し付加価値化された製品の引合いもいただきました。

本誌－最後に、今後の事業展望についてお願いします。

腰島－ INDEX26展などでも新しい商品として紹介させてもらいましたが、瑞光で作ったスパンレースを、瑞光の機械に流して、付加価値として１＋１が３にも４にもなるような製品を今開発しています。そのためのしっかりとした足固めを国内のみならず海外でも進めていけたらと考えています。

本誌－ホームページを拝見していますと、規格外品の再利用や使用済みおむつをペレット加工しての燃料利用などリサイクルの取り組みも始められています。

腰島－はい、お客様と衛生用品を使用する消費者が困っているところを見て、弊社の経験や知識を利用して、何かできないかと検討した時に、お客様の規格外品や使用済みおむつをリサイクルする事業を始めました。日本国内では少しずつ進んでいますが、海外では必要な資格が違うので、難しい部分があります。ただし、先進国や新興国に問わず、国内よりも海外からの引合いが多い状況です。

本誌－ここまでお聞きしてきましたが、コットンを扱う子会社を作られ、それがスパンレース事業の継承し自社での製造につながったと理解します。貴社の天然繊維に対するこだわりはどこにあるのでしょう。

腰島－まず環境に優しい素材ですし、衛生用途としても非常に優れた素材です。SDGs については国内外どこの会社も方針として打ち出しておられます。そうしたことから天然繊維を扱った分野も、今後も大きく伸びていくだろうと思っています。

本誌－ SDGs の取り組みは欧米ではすでに行って当然というところがあります。そうした中で、瑞光の他社に対する強みや優位点は。

腰島－「資材と機械の融合」が挙げられると思います。これまでのスパンレース素材の用途活用ではうまくいかなくて諦めていたことも、私たちの機械が入ることで解決できることが多々あるのではないかと考えます。資材と機械の両方を通してみられる機械メーカーはありませんし、おそらく資材メーカーでも少ないと思います。私たちは“シナジー効果”と言っていますが、これは必ず強みになると思います。そうして、従来なかったものを開発していきたいと考えています。

本誌－このたびの貴社でのスパンレース製造開始は、国内不織布産業の再編など、さまざまなタイミングや縁があってこそのものだったのでしょう。長年培われ、多くのユーザーを抱えるブランド製品が喪われることなく受け継がれたことに敬意を表しますとともに、今後は貴社のブランドとしてますます発展されることに期待いたします。本日はありがとうございました。

■問い合わせ／㈱瑞光　スパンレース事業室
☎072-648-2221　FAX072-648-2604
URL：https://www.zuiko.co.jp/machine/spunlace/